

## 郎世寧畫集

は曾て發表の都度それぞれの意味に於て充分な役目を果たしたものであり、そしてそれに對する氏の努力が多く考證的な方面に向けられてゐたことも斯界の實狀に鑑て當然であつたと思ふ。氏の研究は第一にこの意味に於て永く記憶せらるるであらう。

日本繪畫史に於て特に重要な問題の一つは、それ自身の發展の外に、絶えずその轉向を促す外來刺激の研究であるが、試みにこの書から主要なる題目を數へ上げて見ると、推古天平期に移入せられた大陸様式の性質とこれを容れたる我國の活動の解剖、唐朝様式を享けてその日本化の途に進める藤原鎌倉の大和繪の發展、足利時代に入れる宋元畫の寫實とその影響、徳川時代の南宗畫が準據せる大陸様式と我國自然の描寫との間に持てる矛盾、明清寫生風及び西洋畫の感化と發展など、この方面のほとり一貫せる論述と、また數多くの問題と解決とが提示されてゐるのを見る。就中大和繪の發展に於て、繪卷の形式及び效用上の制限とこれに働く我國自然の性質の敘述は最も精細を極めたる部分であり、圓山派を論じて南嶽風の直接の影響に出づるものとし、その歴史上の役割の一つに桃山時代の障壁畫の寫實の方向への解決を數へられたる如きは、個々の論文に讀むよりも、かやうにまとめられた書中に於て特別の意味を持つて來てゐる。

或はまた日本繪畫の寫實の變遷、大和繪の消長などの問題を探つても同様にこの書の中で氏の見解は略々窺はれるのであつて、個々の問題を取扱ひつゝ、かく一貫して日本繪畫史の一面を示すもののあるのは故人の研究の廣汎と眞摯とによるのである。更に畫家の側に對する深き注意と共感と、流麗なる行文とは氏の詩人的なる半面の齎せる處であらう。我々はこの書に於て數少き日本繪畫史の研究のうちに一つの良書を加へたることを喜び、併せて氏の逝去の早かりしを感むのである。

傳ふるところによればなほ氏の東洋美術に關する論文を纏めて近く公刊する豫定であるといふ。氏の研究を窺ふに更によき手がゝりとなると共に世に裨益するところも極めて大であらう。(渡邊)

菊版 本文五百五十二頁 口繪コロタイプ二枚 挿圖同三十七枚 昭和六年九月十五

嘗て唐宋元明名畫展覽會に於て、北平、金開藩氏收儲の郎世寧筆、春郊閑駿

圖卷、朱啓鈴氏藏郊原牧馬圖等を見た者は、その壯大な構圖と艶麗な色彩とによつて、郎世寧其人が單に中西畫法を折衷した異色ある畫家としてののみならず、支那繪畫史上に於て充分にその地歩を主張して然るべき有數な畫家の中の一人である事を知悉したであらう。しかしこの海西の人、郎世寧 Castiglione, Giuseppe の在來の畫史上に占めてゐた地位は頗る貧弱なものであつて、國朝畫徵續錄、歷代畫史彙傳等の中にも纔かに數字の記述を見るに過ぎず、その傳記にも詳かならざる所多くその畫集すら今日まで上梓せられた事を聞かないのであつた。その一半の理由は彼が宮廷畫家であつて、その遺品の殆んど總べてが舊清朝内府に秘藏せられて國內に流傳する物少く、畫蹟が一般の目に觸るゝ機會がなかつた爲に、注意を牽く事が尠かつた事によるであらうが、一半の理由は、支那人の心理の中にある保守的分子がこの異色ある畫風を正解してその眞價を認むる事は是ざりしに歸しなければならぬ。

今日では故宮博物院に於て殆んど彼の畫蹟の總集とも言ふべき舊清朝内府の大蒐集を自由に展覧し得るやうになり、更に此の畫集の出版によつてその畫蹟の稀觀に屬する我國に於ても稍その全豹を察し得るに至つたのであるから、此の機會に於て彼の作品に對して再檢討を加へて、その美術史上の正當なる地位を決定する事は有意義にして且つ必須の仕事である。

こゝに紹介する郎世寧畫集は四集分印の豫定の中二集の印行を終つたのみであるから、之によつて直ちに何等かの結論を導き出す事は早計の謗を免れ難いが、その大體の作風は充分に窺知する事が出来る。

Attiret に從へば郎世寧は初め泰西の畫法を傳へたが帝の喜ぶ所とならず、已むを得ずして帝の旨に曲阿する爲にその法を棄てゝ別に新體を立てたと傳へられる。その當初の事情は或はかくの如くであつたかも知れないが、かの「如

意題」圖御題に「凹凸丹青法 流傳自海西」とある如き、又「山水」圖の充分に支那畫本來の構圖法を消化せる如き、更に「驚鷲圖」に於ける松樹の描法の遠く王淵邊りに遡源するものではないかを思はしめる如き、何れも帝が泰西畫法を理解し得なかつたものでもなく又彼が決して單に曲阿の爲に支那畫を取り入れたのではなくして、充分の熱意と慎細の注意を以て支那畫を研究したものである事を實證すると言へよう。

彼の畫はその構圖が單調なる嫌あり、又精密を極めて生彩を失つた憾あるものも尠くはないがその「陔星狼」、「墨玉螭」、「端麕」等に至つては豊麗清雅、實に當時の宮廷畫人中の第一人者たる事を如實に示してゐるのみならず、この畫集を通觀して彼の作品を玩味する時、艾啓蒙、郎世寧等の畫風が多かれ少かれ當時の宮廷畫家の殆んど總べての人に影響を與へてゐる事を見逃す事は出来ない。

郎世寧畫集第一、第二集通冊收載する所四十三點、四十七葉。卷首に要領よき郎世寧小傳が掲げてあるコロタイプ影印によつた事は色彩畫家としての彼を傳へるに決して充分ではなく、その製版技術に至つては本邦のそれに比し著しく遜色あるを免れないが、この畫集を印行し得るものが彼の畫蹟の殆んど總べてを收蔵する故宮博物院を措いて他に絶對に頼み難い事を思ふ時、吾人はこの有意義なる事業を計畫せられた故宮博物院當事者に深甚の感謝を致さざるを得ない。

北平阜城門外柵欄兒の耶蘇會士墓域に利瑪竇等と相並んで荒草裡に寂しく瘞められてゐる郎世寧の靈も恐らくこの刊行を嘉し、二百年後に初めて知己を得たるを喜ぶことであらう。(正木)

四六四倍判 映入 玻璃版第一集二十三葉 第二集二十四葉 中華民國二十年雙十節  
——一九三一・一〇・一〇——故宮博物院古物館印行 定價各集金五元

## 東方學報 京都第二冊

東方文化學院は成立以來着々成績を挙げ、内には京都に完備せる研究所の設

立を見るあり、外にはその發表機關として古書複製事業も漸次進捗を見、學術報告もこゝに東京、京都共に第二冊を迎ふるに至つた事は斯道の爲に慶賀に堪えない次第である。

今惠贈を受けた京都第二冊を披見するに、收録する所八篇、内美術に關係するものは伊勢專一郎氏の「顧愷之の山水畫論」、同氏「爽簃館欣賞第一輯」、梅原末治氏「支那古代の銅利器に就て」、水野清一氏「玉璽考」等である。

卷頭「顧愷之の山水畫論」は張彥遠の歷代名畫記に引く所の畫雲臺山記を中心として、顧愷之の山水畫觀を紹介し、それが論畫史上如何なる史的地位乃至意義を持つてゐるかを論じてゐる。氏のこの論文は、支那畫論に美學的整理を加へやうとするの一の試として考へる時は確かに注目すべきものたるを失はないが、稍論理の委曲を求めて全體の結構に緊密を缺いた嫌があるのは遺憾である。

梅原、水野兩氏の論文は純粹に考古學に屬すべき物で、殊に銅利器の考古學的考察に關しては、例へば阮元の商周兵器說等の如き先蹤はあるけれども、その引例の豊富な點に於て充分なる價值を有するものであり、古代銅器の研究が從來の禮器と金石文の研究から次第にかゝる方面に進んで來た事は、直接には美術の中心問題から遠ざかり行くかの感があるにせよ、當代の文化現象の探求の一部として當然爲さるべき仕事であつて、その意味に於ても亦有意義なる業績と言はねばならない。

以上名を掲げた論文以外も夫々その専門部門に於て何れも注目すべきものたるは云ふまでもなく、多士濟々たる研究員諸氏の眞摯な研鑽の成果に對して虔んで敬意を表するものである。(正木)

四六倍版二百八十九頁 圖版十一葉、昭和六年十一月三十日 東方文化學院京都研究所發行 定價金二圓五十錢

## 日本工藝史概説 奥田誠一氏著

凡そ一つの學に關して、その概説的知識を獲ることは比較的容易であると考られてゐるけれど、實はその學を統制して概説に纏め上げること程至難な業は